

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前：久保田 崇（くぼた たかし）
- (2) 年 齢：45 歳
- (3) 参加事業：第 7 回「国際青年育成交流」事業（デンマーク）（2000 年）
- (4) 職 業：静岡県掛川市長



■ 応募のきっかけ

母が地元の広報誌「広報かけがわ」に内閣府青年国際交流事業の募集が出ているのを見つけて教えてくれました。当時私は公務員試験を受けていて結果待ちの状況でした。私はヨーロッパに憧れがありましたので、船の事業ではなく、育成交流事業のデンマーク派遣団に応募しました。政府の事業で自己負担が少ないことも魅力に感じました。単なる海外旅行ではなく、研修として参加することで、得られるものが多そうだったのも理由の一つです。

事業参加経験がキャリアパスに特にプラスになったのはどんなことですか。

ホームステイを体験したことです。デンマークの**人々の普通の暮らしを知ることができ**、また訪問各所で温かいもてなしを受けて、良い思い出しかないですね。福祉国家として名高いデンマークですが、福祉が充実しているのはもちろんのこと、温かい、人のぬくもりが感じられるような施設運営をしているという印象を受けました。

内閣府事業が、民間・NPO 等が主催する事業や留学と異なる点は何でしょうか。

国の機関である内閣府の事業ですから、単なる観光旅行ではなく、人々の暮らしを知ったり、政策に近い立場から福祉について体感できたりするプログラムが組まれている点です。表敬訪問も数多くありましたが、旅行では決してお会いできないような方々とお話する機会をいただきました。帰国後には天皇皇后両陛下へのご拝謁の機会や、皇太子殿下との懇談の時間を与えていただくなど、**皇室ゆかりの事業**であるからこそ、**普段の生活では体験できないような充実したプログラムを体験することができました**。私たちデンマーク派遣団は、皇居を訪れ、美智子妃殿下（当時）にデンマークでの活動についてご報告申し上げました。ある団員が、チボリ公園で財布を落としたことまでお話ししましたところ、喜んで聞いてくださったことを思い出します。こうしたプログラムは、参加青年側に「お遊び気分」で臨むのではなく、相当の見識、**国を代表する青年としての振る舞い**を求めるものです。このような経験の数々が、後に政策立案をしたり、市長として公務を果たしたりする際に役立ってきたように思います。

事業参加の経験が現在のキャリアパスにどのように影響していると考えますか。

私は事業参加後、内閣府に入り、イギリスに留学しているので、当然、キャリアパスに影響があったのですが、何より、**国際感覚を身に付けられたのは大きかった**と思います。特に、地方自治体では海外経験がある人が少ないこともあり、この事業で得た経験は大変役に立っています。例えば、以前いた自治体では、英語の電話がかかってくると副市長の私のところに回ってくるのです。「なんだか分かりませんが、英語の電話ですので、対応お願いします」という感じですよ。私の英語力でも重宝がられるんです。語学力の問題だけではなく、日本国旗と外国の国旗の扱いなど、国際的な慣習やルールについて知っている人も少ないかもしれません。今、掛川市では、アメリカ合衆国オレゴン州ユージン市、ニューヨーク州コーニング市、韓国江原道横城郡及びイタリア共和国ペーザロ市とそれぞれ姉妹都市として交流を続けており、内閣府事業の

経験があってよかったなと思うことがあります。

■ 事後活動について

仕事の延長のような感じではありますが、国際交流の団体や韓国とも交流があるので、そうした集まりに顔を出すことも多いです。掛川市の外国人比率は 3～4%です。比率としては大きい方だと思います。人数にすると 4000 人くらいです。外国の方々への対応にはいろいろなものがあります。例えば、「広報かけがわ」の多言語化に取り組んでいます。掛川市は海と接しているので津波警報の放送は日本語、英語、ポルトガル語で流しています。外国の方々のうち、一番多い国籍の方がブラジル、2 番目がフィリピン、3 番目は中国だったんですが、最近はベトナム国籍の方が多くなりました。

彼らとの共生に関して最近特に難しさを感じるのは、コロナワクチンの接種です。外国人にどのようなご案内を出すかはとても重要です。現在、外国の方々の接種率は上がっています。外国人には密接につながり合っているコミュニティがあったり、インフルエンサーがいたりしますので、そうした方々にご協力いただいてワクチンについても周知してもらうようにしてきました。もともと文化や習慣が違いため、大人数で会食しないように通知してはいても、大勢でバーベキューを楽しんだりしてしまうこともあります。大人数で集まることを大切にする価値観があるので、一律に禁止してもなかなか納得してもらえないのです。そこで、病院と連携して啓発動画を作ったりするなど、日々工夫を重ねています。文化や習慣の違う方々に新しいワクチンを打ってもらうためには、コミュニケーションの仕方など、様々な課題があることを日々痛感しています。

県外に出たことのない生粋の地元育ちの方々に比べれば、私は、外国人は生活習慣や考え方が日本人とは異なるということを知っているだけでも良かったと思います。極端な話、「こんな時に大勢でバーベキューをしてけしからん。追い出してしまえ」などと言い出す人がいないとも限りません。でも、自分たちとは考え方や習慣が異なる人たちと対立したり、排除したりすることは、問題の解決にはなりません。そもそも生活習慣が違い、多言語化されていないため、必要な情報が行きわたっていないせいかもしれないのです。すでに地域にかなりの数の外国の方々がお住まいで、地域経済にも貢献してくださっています。私たちは共生していく必要があるということを常に念頭に置いていなければならないと思います。

事業参加時の国際的・地域的な人的交流は今も続いていますか。

デンマーク派遣団に限らず、IYEO 関係のつながりがいろいろあります。例えば、静岡県磐田市出身の既参加青年で自動車会社にお勤めの方と事後活動の集まりでお会いしました。その方のお勤め先の会社が地域交通の案件で提案があるので掛川市にお邪魔したいとのことと来ていただいたことがあります。地域公共交通の手の届かないところのサービスを始めているそうで、地域課題の解決について具体的な部分まで相談することができました。

内閣府事業と留学との違いは何でしょうか。

私も 2 年間ほど留学したことがありますが、留学は滞在期間が長いので、その国の日常生活を知ることに適していると思います。一方、内閣府の交流事業は、政府機関、皇族等への表敬訪問の機会があるなど、通常の留学では決して経験できない特別な体験ができるという点で優れています。留学中は大学と自宅を往復する日々で、研究対象にでもしていない限り、福祉施設や経済産業関連の機関を訪れることはありません。自分の専門分野以外のいろいろな場所を視察して見識を深められるのは、内閣府事業の特徴だと思います。

今後の内閣府事業への提案がありますか。

最近の内閣府の状況が分かりませんので、確実なことは言えないのですが、コロナのように三密を避けなければいけない状況下では、船の事業は難しいと言わざるを得ません。しかし、私個人としては、交流事業そのものを中止していただきたくありません。今は非常に困難な時期ではありますが、何とか乗り切っていただきたいというのが本音です。

未来の参加者の皆さんにメッセージをお願いします。

若い皆さんがこの事業に興味を持っていただくことを切望しています。今後、少子化や人材不足などにより、ますます日本の状況が厳しくなっていく中で、海外と上手く付き合っていないといけない場面も多々生じるかと思います。若い方には内閣府事業を活用して、海外との連携を目指して励んでいただきたいと思います。

久保田崇氏プロフィール

京都大学卒業後、「国際青年育成交流」事業（デンマーク）に参加する。内閣府に入府。内閣府青年国際交流担当などを経て、2011年8月から2015年7月までの4年間岩手県陸前高田市で副市長を務める。2016年4月から、立命館大学大学院教授に就任。2019年4月から静岡県掛川市副市長を経て、2021年4月より掛川市長を務める。